

ねじればね

昭和37年8月25日 発行
 編輯者：後藤光男
 大阪府泉北郡高石町北609

日本甲虫学会

August 1962

神戸市東灘区御影町天神山46

ゲニタリヤ浸出液について

野村 全

最近、種の種類にgenitaliaの形状が利用されることが多くなつたが、微小甲虫のgenitaliaの抽出にはかなり高度の技術が必要であり、なかなかうまく取り出せないことがある。

私はOttd Scheerpeltz氏から和田義人氏あての私信(1953年)による、つぎのような浸出液を利用して相当好成績をあげているので、ここに紙面を借りて紹介したい。なお、この方法を教えていただいた両氏に深い感謝の意を表する。

すなわち、「96 grädiger Alkohol (96度のアルコール) 60% + Aquafoetis (蒸留水) 35% + Essigsäure (醋酸) 5%」の混合液に虫体をつけると、小形のハネカクシ等は浸透圧の関係でgenitaliaが自然と出てくる。

私の経験では、Aleocharinae (ヒゲブトハネカクシ亜科)のものは非常によく出る。この場合、採集してすぐの標本の方がよく、又一昼夜ほどつけておくのがよい。Staphylininae (ハネカクシ亜科)、Paederinae (アソガタハネカクシ亜科)やHisteridae (エンマムシ科)のものもかなりよく出るが、Saprinus (マグソエンマムシ属)等のように黄銅色の光沢のあるものはやゝ黒っぽく変色する難点がある。genitaliaを出したまま標本にしておくと再び引こんでしまうので、虫体から切りはなして保存するか、Basal orificeにつづく筋肉質のところを押えつけておくとよい。なお、Oxyporinae (セスジハネカクシ亜科)のものは非常に出にくい。

以上を総合すると、この浸出液は簡単にgenitaliaが抽出できて非常に便利であるが、万能液というわけにはいかない。又、ハネカクシ・エンマムシ以上の甲虫に試みたことがなく、古い標本でやつてみたこともないが、皆さんの研究に幾分かでも役だてば幸いである。

最後に、翌1954年に再び同氏から「醋酸エーテル混合液で虫を殺した直後(2~3時間以内)

に、96度のアルコール60%+普通の水30%+植物性の酢10%の混合液に虫体を2日ほどつけるとgenitaliaの細部が出てくるから、これを乾燥する」という便りがあったことを付記して筆を置く。

月 例 会 前 後

従来第三土曜の午後が開かれて来た月例会には困難な問題が幾つもあった。土曜日の午後は案外忙しくて参加出来る人が少いこと、会場を借りている博物館で自然研究会の役員会が例会と重複する機会の多いことなどがその主な原因であつた。そのため月例会の意図する会員総互の親睦と知識の交換は余り果たされず、顔見知りの少数の会員による雑談会に終ることが多かつた。

ここで覗いて考え直して見ると、これ迄の月例会でも終了後軽い夕食を共にする機会が多く、仕事が終わって後から参加する人もあつて、二次会の方が盛況?と云う場面もしばしば見られた。

それではむしろ平日の夕方からの方が都合のつく人が多いのではないかとの意見が出て幹事諸氏の御努力もあつてその第一回が6月22日(金)に開かれることとなつた。

当日午後六時、林幹事自ら入口での出迎えに恐縮しながら狭い階段を上ると、そこはミナミの賑いも喧噪も何処へやら、忽然と虫屋天国が出現していた。珍らしい水戸野先生の顔や飛び入りの蜂の佐藤納氏が腹をゆすつて談笑しているのが眼につく。顔馴染みの人も初対面の人も互いに打ち解けて、三々五々と語り合い、なごやかな雰囲気は漂よつていた。一方、その後も続々と現われる会員に世話役もとまどつて嬉しい悲鳴をあげ、足のとれたおぜんや果ては麻雀台まで動員される始末、それも一段落つくと、大倉乾事のあいさつ、会員の紹介があり和気あいあいの中に夕食を済ますと、いよいよ待望の日本産甲虫チェックリスト(アトキリゴミムシ類)の配布とその解説に入つた。リストが活字になつたのも嬉しく、同じ属内での近似関係による配列法も新趣向で担当の芝田氏の御努力を多としたい。ただ、毎回感ずることではあるが、この様な場合に標本の供覧が最も望ましい形とは云え、微小種や破損の心配、回覧の方法などに問題があるとすれば、紙にマジックインキで図示する程度のことはやつて欲しい。今回は斑紋の微妙な変化が問題となるだけに特にその感を強くした。

その後、新着図書を紹介、回覧があり、各人が思い思いの話題に話をはずませ、コーヒーを

する内に定刻も過ぎ、久し振りに好き時を持ち得た喜びに名残りは尽きないが、一応解散となり、次会での再会を約して閉会となつた。とにかく大先輩あり、定連あり、新顔ありの近来にない大盛況で、目出度く第一回は終了した。

なお、会終了後、一部の会員は関西の不良虫屋の巣として名高い某喫茶店で二次会を開き、そこでの珍談もまた数多いがこの紙面での紹介は遠慮することとした。(生谷義一)

昆虫学評論第15巻の会費を納めて下さい

会費切れとなりましたので次巻分会費500円を遅くとも11月30日迄に御納入下さい。

新 入 会 員

350.
351.
352.
353.
354.
355.

住 所 変 更

330.
95.
305.
148.
344.
295.
275.
298.
26.
163.
56.

認 定 退 会 (1962・8・1)

月 例 会

第48回例会 昭和37年5月19日

出席者：後藤光男・林 匡夫・河野 洋・村上喜与志・中川宗次郎・大倉正文

林 匡夫……日本産天牛類について(5)

第48回例会 昭和37年6月22日

出席者：春木蝶夢・林 匡夫・広田嘉正・生谷義一・今中 宏・石田 裕・加治木義博・

河野 洋・河野伊三郎・松田 厚・水戸野武夫・村上喜与志・大倉正文・佐藤 納

・沢田高平・芝田太一・山口道夫・吉川正彦

芝田太一……日本産アトキリゴミムシ類について(1)

林 匡夫……新着図書の紹介, 回覧

第50回例会 昭和37年8月17日

出席者：藤田国雄・林 匡夫・石田 裕・河野 洋・松田 厚・村上喜与志・成瀬善一郎・

大倉正文・芝田太一・辻 啓介・山口道夫・横山 創・吉川正彦

芝田太一……日本産アトキリゴミムシ類について(2)

昭和36年度収支決算書

(自昭和36年1月1日
至昭和36年12月31日)

日本甲虫学会

収入の部		支出の部	
入会金	1,500-	印刷費	180,467-
会費	172,680-	通信費	31,824-
バックナンバー代	19,600-	消耗品費	12,390-
判刷代	15,400-	大会費	15,320-
図鑑印税	44,200-	幹事会費	5,470-
大会会費	6,000-	雑費	3,740-
雑収入	22,208-	合計	249,211-
前期繰越金	229,948-		
合計	511,536-	差引次期繰越金	262,325-

志賀製品のあつせん

インロー型標本箱 大形500円(定価530円), 小形330円(定価350円)

昆虫針(ステンレス無頭) 1~3号 各号とも100本包 70円

その他の品については, お問合せ下さい。

なお, 現品は芝田太一氏宅(大阪市東区淡路町4丁目68 電話: 231局8756)にありますから, 必ず風呂敷か包装用具を御持参でお越し下さい。

標本には小形で美しい本会時製のラベルをお使い下さい

詳細は後藤宛御照会下さい